

C年復活節第6主日 ヨハネ14章23―29節

〔直訳〕

23 答えた イエスは、そして、彼は言った、彼に、

「もし、誰かが、愛するなら、私を、

私の言葉を、彼は保つだろう、

そして、私の父は、愛するだろう、彼を、

そして、彼のもとへ、私たちは来るだろう、

そして、居所を、彼のそばに、私たちはつくるだろう。

24 私を愛さない者は、私の言葉を、保たない。

そして、言葉は、ところの、あなたがたが聞く、

私のものではない、

そうではなく、私を遣わした方の、父の。

25 これらのことを、私は語った、あなたがたに、

あなたがたのそばに、留まりつつ。

26 だが助け手は、

聖なる霊は、ところの、遣わすだろう、父が、私の名において、

その方は、あなたがたに、教えるだろう、すべてのことを、

そして、思い起こさせるだろう、あなたがたに、

すべてのことを、ところの、言った、あなたがたに、〔私が〕。

27 **平和を** 私に残す、あなたがたに、

平和を 私のものを、私は与える、あなたがたに。

とおりにではなく、世が、与える、

私は、与える、あなたがたに。

揺り動かされるな、あなたがたの、心は、

また脅えるな。

28 あなたがたは聞いた、次のことを、

私が、言った、あなたがたに、

『私は立ち去る、そして、私は来る、あなたがたのもとへ』。

もし、あなたがたが愛しているなら、私を、

あなたがたは喜ぶのだが、次のことを、

私は行く、父のもとへ、

というのは、父は、私より大きく、ある。

29 そして、今や、私は言った、あなたがたに、起こる前に、

ようにと、それが起こるときに、あなたがたが信じる。

〔新共同訳〕

23 イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしはその人のところに行き、一緒に住む。24 わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。」

25 わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。26 しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。27 わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。28 『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る』と言ったのをあなたがたは聞いた。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。父はわたしよりも偉大な方だからである。29 事が起こったときに、あなたがたが信じると、今、その事の起こる前に話しておく。

①構成

①a 23—25節

23節と24—25節では、「愛する」「私の言葉」「保つ」という語によって対応している。

①b 23節では「もし誰かが私を愛するなら、私の言葉を彼は保つだろう」と述べた後に、「そして」によって導入された未来形の文章が続き、将来への約束が示される。

①c 24節では否定形で「私を愛さない者は私の言葉を保たない」と述べた後に、「そして」によって導入された現在（24節）と完了（25節）の文章が続き、私の言葉の本質が明らかにされ、それを保たなければならない理由が説かれている。

イエスを愛する者はその言葉を保つが、それはイエスが神の言葉を「そばに留まりつつ」語ったからであり（25節）、その言葉を保つなら、父がイエスと共に来て、居所をつくるからである（23節）。

①b 26節

この段落の主語は「助け手」、「聖なる霊」、「その方」というように三度も繰り返され、その役割が明らかにされる。聖霊はあなたがたに「教え」「思い起こさせる」という働きをする。

①c 27節

この段落では「平和を」を文頭に置いて強調する文章を繰り返した後に、その平和の与え方を述べ、最後に「揺り動かされるな」「脅えるな」と励ます。

①d 28—29節

28節四・五行目の「もし私を愛しているなら、喜ぶのだが」は文法的には反実仮想という構文である。弟子たちは現実にはイエスが期待するような愛を彼に向けることができない。そこで弟子たちには喜びがなく、悲しみに襲われている。イエスはそのような弟子に「信じて、愛する」ことを求めている。

②イエスの言葉を保つ（23—25節）

㉓ 23節は「イエスは答えた」で始まる。イスカリオテでない方のユダは、イエスが自分を世に現さないことに疑問を持ち、それは「なぜでしょうか」と尋ねた（22節）。23―24節はその問いへの答えであり、イエスを受け入れる者と拒絶する世との決定的な分離が示されている（10「世は言を認めなかった」、837・43「わたしの言葉を受け入れない、聞くことができない」、847「神の言葉を聞かない」）。

㉔ 23節ではイエスを愛するとは「私（＝イエス）の言葉を保つ」ことだと語り、さらに24節では同じことを否定形で「私を愛さない者は私の言葉を保たない」と言い換えている。イエスを「愛する」か「愛さないか」は、イエスの「言葉を保つ」か否かで決まる。「私の言葉を保つ」なら、イエスと父がその人のもとに来て、神との深い関わりに入る。

㉕ このように「私の言葉」に大きな意義が置かれているが、24節二行目以下でその理由が明らかにされる。イエスの言葉は勝手に語られた自分の言葉ではなく、イエスを遣わした父の言葉である。しかもイエスはそれを「あなたがたのそばに留まりつつ」語っている。イエスの「言葉」は人を束縛する指令ではなく、神からの慈しみのこもった呼びかけである。このイエスの言葉を保つとき、その人は神の愛の対象となり、神がイエスと共に来て、そのそばに居場所をつくり、語りかける。こうして神と人間との交わりが深まっていく。「神が人々の中に住む」という約束は旧約聖書で述べられている約束である（出二五8、レビ二六11、ゼカ二一四―15）。

③ 助け手である聖霊（26節）

㉖ a 「助け手」である「聖なる霊」が遣わされることによって、弟子とイエスのつながりは将来も継続される。この「助け手」はすべてのことを「教え」、イエスの言葉を「思い起こさせる」ことになる。こうしてキリスト者は、父なる神と子なるイエスそして聖霊によって、手厚く導かれる。

㉗ b 「助け手」と直訳した語はパラクレートスである。この語は接頭辞パラ（わきに・傍らに）と動詞カレオー（呼ぶ）との合成動詞パラカレオー（呼び寄せる・励ます・慰める）から派生した名詞である。パラクレートスは文字通りには「誰かを救助するために呼び出された者」を意味する。古典ギリシア語では、ごく一般的に「仲介者・弁護者・助け手」の意味で使われ、まれに裁判で訴えられた者のための「弁護人・弁護士」を表した。

㉘ c ヨハネ福音書では聖霊（真理の霊）が「パラクレートス」と呼ばれる（一四16・26、一五26、一六7）。ヨハネの手紙一2章1節ではイエス自身が「パラクレートス」と呼ばれており、ヨハネ14章16節でも「別のパラクレートス」として真理の霊に言及している。「パラクレートス」は神にとりなし（一ヨハ二1）、人間の法廷でその声が聞かれる（ヨハ一五26・27、参照マタ一〇19―20、ルカ二二11―12）。

㉙ d 26節ではパラクレートスの働きについて、「その方は、すべてのことをあなたがたに教え、私があなたがたに言ったところのすべてのことをあなたがたに思い起こさせるだろう」と述べている。聖霊は「思い起こさせる」ことによって弟子たちを「教える」。この「思い起こさせる」は単なる過去の想起ではなく、イエスの言葉や行いの意味を説き明かすことであり、イエスへの信仰を沸き立たせることである（二22、一二16）。聖霊の働きを受けて、弟子たちはイエスの言葉を守り（23節）、イエスを信じ（29節）、イエスについて証しする者となる（一五27）。

㉚ e ヨハネ福音書では、弟子はイエスが復活した後にイエスの言葉や聖書の言葉を「思い起こす」ことによって、イエスの地上の活動の意味を知る。真理の霊は「真理をことごとく悟らせ」（一六13）、キリストの神秘（五39）、イエスの言葉と活動としるしの意味（二16・19）、復活の前には弟子

には理解できなかったすべてのことを理解させる（一三七、二〇九）。こうして聖霊はキリストの証人となり（二五26、一ヨハ五6・7）、不信仰なこの世の誤りを明らかにする（一六八―11）。

④ イエスが与える平和（27節）

① イエスは「平和」を残す。この「平和」は戦争がないというような消極的な状態のことではなく、メシアが運ぶ救いによって生じた「平和」を意味している。このような平和はこの世が与えることのできる平和とは根本的に異なっている。しかもメシアが運ぶ救いに基づく平和であるから、この世の与え方とも異なっている。弟子たちはイエスの言葉を理解しないこの世にあつて、イエスから引き継ぐ世との戦いの中にも異ならぬが、「平和」を受け取ることができる。

② 世が与える平和は不完全なものにすぎない。しかし、イエスが与える平和は天からの救いに基づく平和であり、不安定な平和ではない。だから「揺り動かされるな、脅えるな」と呼びかけることができる。この「揺り動かす」は「（水を）かき混ぜる」といった意味でも使う。イエスの言葉に留まるキリスト者はその心が「かき回されて、不安定になる」ことのない平和に満たされる。

⑤ 立ち去るイエス（28―29節）

① イエスは自分の死が間近に迫ったことを再び弟子に告げる。しかし、イエスにとってその死は「立ち去る」こと、父のもとへと帰ることなのであつて、無の世界に閉じ込められることではない。

「立ち去る」と直訳した動詞は、ヨハネ福音書では特にキリストが御父のもとへ「行くこと」を表す。その父は「私より大きい」方である。だから、父のもとに戻ったイエスが執り成すなら、今、イエスが与える以上の平和を与えることができる。また14章3節が「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻つて来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる」と述べるように、イエスが父のもとに行くのは、イエスの言葉を保つ者のために場所を用意するためであり、用意ができれば、彼らを神との深い交わりに招くために、再び戻つて来る。

② それゆえ、イエスが去ることはむしろ「喜び」となるはずである。この「喜び」も世が与える喜びとはまったく異質のものである。最後にイエスは、今語ったことは確実だと念を押す。それは「あなたがたが信じる」ためである。

⑥ イエスの平和に満たされ、喜ぶ者となる

① イエスの言葉もイエスが与える平和も喜びも、この世の理解を超えるものである。そうであるなら、イエスの言葉を知るためには、常にイエスの言葉を思い起こし、その意味を尋ねなければならぬ。聖霊が弟子に遣わされるのは、自分の思いを離れて、神の言葉に聞くためである。聖霊の教えに身を委ねて、開かれていくことが弟子に求められている。

② 神のもとへ行くイエスは弟子に言葉を残す。イエスは世を去るが、弟子とのつながりが断たれるわけではない。そこで弟子たちがどこに留まるべきかをイエスは示している。弟子に期待されていることは、イエスの言葉を聞いて（24節）、イエスを愛し（28節）、信じることであり（29節）、心が揺り動かされたり、脅えたりせず（27節）、喜ぶことである（28節）。そのように生きることもができるのは、イエスが「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない」（一四18）と語っているように、イエスが「平和」を残し、父が「助け手」を送るからである。父と子と聖霊がひとつになつて、この世に残される弟子を喜びへと招いている。